



3月学園便り 学校法人小泉学園 東京いずみ幼稚園

理事長・園長 小泉敏男

小1が書いた作文？驚きです！“感動の本との出会いは一生の宝物”成長の機会を活かす母の愛情

昨秋のある日、一本の電話が鳴った。電話の主は、致知出版社の藤尾社長である。8月末に私と副園長で監修した『国語に強くなる音読ドリル』のご縁で歓談の機会があったのだが、直の電話は初めて。しかも口調も興奮気味に聞こえたので何事かを確かめると、社長執筆の本の読書感想文コンクールで、小学1年生が書いた出品作文を読んで驚いているというのである。在籍名が松戸市立小とあるので、私の運営する保育園出身の子と推測し、確認もあってのことであった。社長がおっしゃるには、「コンクールは前11回重ねているが、小学生が書いたのは記憶にあったかな…」とのこと。加えて、コンクールへの応募総数は中高生を中心に736通、そのうち小学生は4通でそれも私の園の子供かな、とのこと、「内容に感銘しつつ、文章や文体から小1の子が自力で書いたと確信した」と力強くおっしゃられた。私は社長自らが読んで選考することに驚いたが、著者である社長だからこそ確信を以て間違いなく自力で書いたものと判断されたのだろうと推測した。私も後日作文を拝読したが、藤尾社長の鑑識眼に納得した。

コンクールの題材である『心に響く小さな5つの物語』は、一昨年に私が手にして読み、感動を覚えた。園のスタッフにも読んでもらい、大半が「涙でした」の反応で、本の活用を一考した。キャッチコピーは『15分で読める感動実話』、これなら多忙な母親でも可愛い我が子のために読めるであろうし、話も出来るだろうと考え、卒業記念品として昨年度園卒業の母子に贈呈した。私は「子育ての鍵は母親にある」といつも話す。我が子の良き育ちは、母の愛情一杯の綺麗な言葉遣い、良き言語、美しい所作振る舞いを、我が子が隣で、耳にして、目にして、共に口にするすることで自然と育まれていくものである。つまり、良き子育ては、母が整える環境、良き五感の刺激が左右するので、その価値観をしっかり整える事から始まると言える。我が子の内言（ボキャブラリー）を豊かにしたいと思うならば、母親が良き言葉をいつも傍らに置いて目にして口にする環境が不可欠だからである。少しでも読んで我が子に対して「良いインプットになる」と見栄を張るくらいの気持ちが大切なのである。前述の『音読ドリル』の発行も、本の贈呈も、それを意図して企画したものである。

その後、読書感想文コンクール募集の連絡があり、夏休み中の課題の一つにでも、と考えて卒業した1年生には各園を通じて案内した。1月半ばの表彰式には私も出席した。卒業生は「社長特別賞」の受賞だが、736通の中高校生に交じて5名の内に入る快挙である。本人による発表披露も、1300名の大人の出席者を前にして、所作も堂々、口調もしっかりで実に立派であった。会では私自身も受賞者の出身保育園の理事長と紹介を賜り、心底誇らしく思えた。披露中に耳に入ってきた「本当に小学生が書いたの？」の周囲の眩きにも、「本当に本人が書いたものです」と笑顔で返すことができた。私の感想は「親が偉い」「子への正しい愛情の注ぎかたが素晴らしい」。勿論、1年生で自分でも読んで感動した本との出会いは貴重であるし、それを文章にして残せたことは自分の“宝物磨き”そのものである。受賞者のご両親に何うと、入園前から読み聞かせをしており、在園中・進学後も絵本を通しての親子のやり取りが続いているとのこと。これには私も心底嬉しく思う。

一方で、結果として応募4通は本当に少ない、が実感である。私は様々な機会、事ある毎に「脳育ちの見地からも小学3年までの進学後が一番大事で、園生活の延長でしっかり育ていける環境にもかかわらず、我が子の成長の良き機会の認識、気づきが変わらずに乏しい」「今が一番効果的でやり易い」など、子育ての在り方や意味、親の愛情の在り方や向け方、それらの効果的な方法を、園スタッフと一丸となって伝えている。しかし、現実はなかなか伝わらないようで、自分の力不足を痛感する。本も子育ての節目にと意義も伝えて贈ったが、その後の本の扱いはそれぞれの親に委ねられている。感想文の応募は任意だが、「ああもったいない。良い機会であったのに」と思わざるを得ない。結局は子育てはやるかやらないかなので、何もしなかった親は本当の子育ての喜びを知らずに年を重ねていくことに、行く末を憂慮するのである。特に、才能育み教室に通わない親子は、進学先の学校や友達などに染まってしまう、本当に大丈夫ですか、と心配になります。

私が申し上げる知見を素直に受け入れて「やってみたら、効果が出ました」という声も時折戴く。そうした親子の様子を見ると、成長途上でも「インプットに嘘はない」と合点する。親の子育てに対する素直な姿勢や気づきは、子どもにも好影響を与え、子育てが良き循環で自然と上手くいくようになります。今回受賞の親子も、本を読みあって話も沢山した時間は貴重で、文章にした喜びや充実感を想像すると、本当に素晴らしい機会となったと言えるでしょう。園生活の良さを見つめて、現状の子育て、子育ての良さを理解しましょう。様々な催事を利用し、親子が前進できる良い機会になるよう期待します。

※小1女子の書いた文章です。
原文のまま紹介します。

『心に響く小さな5つの物語を読んで』

私は七才です。だから、七年間生きています。ママにさいしよに出会ってからつきにパパに出会って、それから沢山の人に出会いました。この本には、人との出会いが大切だと言うお話が沢山書いてありました。

中でも『縁を生かす』は、服装が不潔でだらしない少年が五年の時の先生と、出会って本当のことをわかってもらえてどんどん幸せになって行く話でした。私はクリスマスに少年がわたしたママのこうすいを先生があとからつけて少年の家に行った時「あ、お母さんの匂いきよらはすてきなクリスマスだ」と言うシーンできっとママにあえたみたいにうれしかったと思いました。だから十年してから先生をけつこんしきに、母のせきにすわってくださいとカードをかけたんだ。先生も幸せだろうと思いました。

『喜怒哀楽の人間学』は、私がとても沢山泣いてしまったお話です。大好きなママがきゆうに乗るなど鬼のようになってしまつて、その後に死んでしまつたら私ならママにきらわれちゃつたと思つてすつとないと思っています。それからすつとかなしいまま生きていた十三才の時、ママからあいされていたことをしつて、大好きなママを大好きにもどれて本当の本当によかつたと思いました。

『人生にテーマ』に出てくる重いびよろきの少年は、自分のいのちがきえる前に生んでくれたママにありがとうをつたえていました。自分がつらい時にだれかのためにできるのは、とてもすごいママのことが大好きなのが分かりました。私だつたらで

きるかな。ママのことをかながえたらできるきがします。

『夢を実現する』。自分がやりたいことになりたい夢をまよわないですすんで行く人を私はかつこいと思います。私は保育園の時からすつと夢があります。だからまよわないでがんばつてすすもうと本をよんで思いました。

『人の心に光を灯す』。おかげさま、は、人にかんしゃをするきもちだと思います。ありがとうのかんしゃのきもち、人と人をつなぐ言葉だと本をよんで思いました。

この本をよんでわかつたことは、2つあります。一つめは、人と人の出会いは、大切で、一つめは、命を1しようけんめいに生きる人は、だれかの心をうこかすと言らことです。

私は、5つの物語の人たちのように、いっしようけんめいに生きようと思つた。よんで良かつたです。